

今月は、日々のとなりで生まれてくるような作品が多かった。  
とくに惹かれた作品をあげる。

きみはいつ初潮を迎えたんだろう  
スローモーションの花火をみる 白野 新潟県

初潮というのが、大人になることへの比喻ならば、そこには残酷なものが含まれているかもしれない。だからだろう。僕らは「スローモーションの花火」を無言で見るほかないのである。

まだ声がするうちに雪を見に行く 細村 星一郎 東京都

こんなふうを書けるのは、少年の頃の雪が降ったときの高揚感を忘れないでいるからだろう。

私が死んだ後の夕焼けの美しさ まちりこ 埼玉県

夕焼けは生きているから美しいと感得できるのだが、作者は死んだ後の夕焼けを美しいと書く。死んだあとこそが美しいものとなるかのように。むしろそれは逆説的に作者の願いを写し出しているのかもしれない。

世界のしゃっくりで  
よるがあけていく 翠 東京都

世界のしゃっくりでよるがあけるといふ発想の飛躍と新鮮さ。向日的で外連味のない書きぶりに好感が持てる。

2番出口の階段を上る間の感情  
だけ連ねた日記 浅葱 愛知県

乾いた文体。中澤系の短歌に「3番線快速電車が通過します理解できない人は下がって」というのがあるが、生の不安定感を表しているという点で通じるところがある。そうした感覚と文体を磨いていくことで、新しい表現が開かれることがあるに違いない。